

## 令和2年度 新ニーズに対応する九州がんプロ養成プラン 在宅・地域医療実習

実習生：岩野 佑介

実習先：阿保外科医院、出口外科眼科医院、白鬚内科医院、安中外科・脳神経外科医院、ちひろ内科クリニック

実習期間：令和2年11月11日（水）～令和2年12月9日（水）

### 実習生感想

在宅医療には大学や市中病院で治療を受けた患者の「その後」を守る重大な使命があるにもかかわらず、多くの医師が実態に触れる機会が少ない。とかく病気をみがちな大病院では触れることの少ない全人的医療を実践している核心に触れ、「その後」への円滑な意思疎通に精通するべく、5つの医院で2度の実習を行った。

#### ①阿保外科医院：阿保先生

長崎大学腫瘍外科のご出身で、術後フォローやターミナルまで、また日見から飯盛に至るまで東長崎を広くカバーされていた。iPadで処方や紹介状まで書ける手軽さを活用されていて、移動中にかかってきた電話からすぐに処方が出るスピーディーさにも驚いた。老人ホームへの訪問診療や特定健診、胃瘻の管理など様々な要望に応じておられた。24時間訪問看護システムがあるため、以前より負担は軽くなっていることや、在宅医療チームを後述の出口先生、白鬚先生、それにゆきなりクリニックの行成先生と作っておられ、それぞれの負担が軽くなるようなシステムがあるということもお聞きした。



#### ②出口外科眼科医院：出口先生

第一外科ご出身の先生で、水・木を休診にし、訪問診療をされていた。

血液疾患の患者に輸血をするため、訪問の前日に採血し輸血の是非を決定、当日朝に赤十字から輸血パックを取り寄せ、午前中にクロスマッチ。午後に輸血施行した。膀胱癌のターミナルや頸髄損傷、脳出血後後遺症など多岐にわたる患者を丁寧に診療されていたのが印象的だった。



### ③白鬚内科医院：白鬚先生

2003年結成の長崎在宅ネットの創設者。看護師・事務兼ドライバーを含め4人で訪問診療した。出口外科、阿保外科と比較すると良性・慢性疾患が多かった。印象的であったのは往診時意識清明だが右上下肢の不全麻痺が新たに出現。転倒歴もあったため慢性硬膜下血腫を疑い、その時点で市中病院へ受け入れ依頼の上、救急搬送依頼。持参のPCで紹介状を書き、医院の事務に連絡しFAX依頼。救急隊が到着するころには手続き完了していた。後日お聞きしたところ見立て通りで、手術となった。長年長崎の在宅医療を担ってこられた厚い信頼で、スムーズな受け入れが可能になっていた。丁寧な診察に加え、患者家族の相談にも丁寧に応じられていた。胼胝の除去など「どうしたらこの患者さんにとって一番良いと思うか」という問いへの1つの答えを実践されており、信頼される理由が腑に落ちた。



### ④安中外科・脳神経外科医院：安中先生

脳神経外科がご専門の先生。独居やサービス付高齢者向け住宅、グループホームなどの訪問診療に同行。限られた時間の中で患者の変化を見逃さないように常に気を配られていた。診察や処方に加え、チームで診ている患者の電話相談にも丁寧に応じられていた。グループホームのスタッフと状態の変化についてディスカッションしたり、皮膚潰瘍処置に対して皮膚科専門看護師と治療薬や今後の方針について検討したりするなど、他職種への信頼がうかがえた。

### ⑤ちひろ内科クリニック：土屋先生

医師会の理事を務める先生。

患者や家族の話を親身に傾聴する姿が印象的だった。様々な事情で入院できない患者に対して、在宅でのケアの選択肢を呈示し、また最期をどう過ごしたいかをスタッフを交え患者と決めていく現場で、チーム医療のリーダーとしてご尽力されていた。またACP（Advanced Care Planning）を推進する会の理事をされており、患者の意思決定に寄り添っておられた。また今回実習中に医師会のCOVID-19 PCR検査場に同行させていただいた。大変な状況にありながら、開業医の先生方と連携して困難に対処しておられた。

どの先生もなくてはならない在宅医療の要としての手腕を発揮されていた。24時間看護システムやチーム制で負担が少ないシステムを構築されていた。お忙しい中ご指導いただきありがとうございました。

【今後の予定：臨床・研究等】

癌プロフェッショナル養成のプログラムとして訪問診療に同行し貴重な知見を得た。訪問診療の現場は市中病院の「その後」だけでなく医療の本質に迫る全人的医療の最先端であった。この経験を踏まえ医師として自分の役割を全うしていきたい。

<実習報告会>

